

武德安民記

附錄  
九四  
九五

場

戰記

庫文閣内			
五〇函	三三	和	
	九	書	
二架	一六	號	類



内閣文庫	
番號	和 33491
冊數	16 ( 16)
函號	150 5

第三





武德安民記附録卷之四

目錄

- 一 賜恩祿於御譜代諸將之夏
- 一 大副家諸族屬御方族或回忠或降泰之輩本領安堵之夏
- 一 被放小川赤佐之米邑夏甘松倉之夏
- 一 伊達上杉兩家之兵官代合戰之夏
- 一 兩公移于伏見新城夏付台德公御入洛御任官之夏
- 一 伊達政宗重而出張于信夫郡夏付阿武隈川



一 戦之夏

一 政宗与上杉勢於松川合戦景勝方敗北付梁川

一 城兵襲政宗後奪輜重夏

一 城兵襲政宗後奪輜重夏

一 城兵襲政宗後奪輜重夏

一 城兵襲政宗後奪輜重夏

一 城兵襲政宗後奪輜重夏

一 城兵襲政宗後奪輜重夏

一 城兵襲政宗後奪輜重夏

武徳寺氏記附録卷之四

賜恩 祿於御譜代諸將夏

斯 陽ヲムカヘ慶長モ六年ニナリケレハ元旦ニハ

神 君ノ台年ニ依テ列侯以下悉ク大坂本城ニ登テ

恒 例ノ如ク秀頼ヘ謁シ歳首ヲ祝ス同十五日ニ諸侯

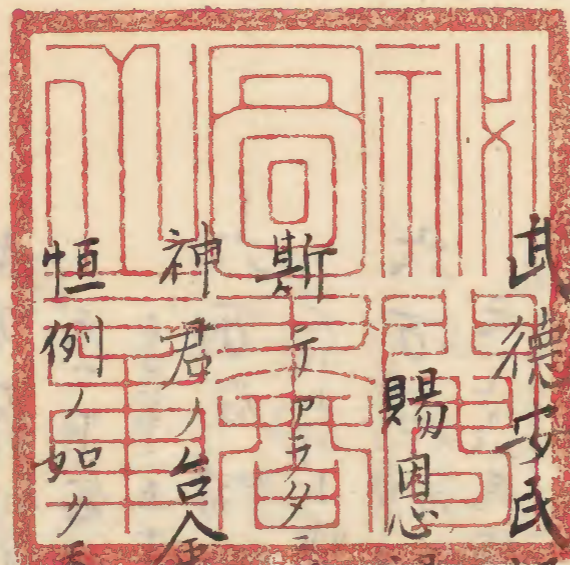
諸士 殘処ナク同ク西ノ丸ニ登テ神君ヘ拜謁シ賀

儀ヲ 述ルコトハ聊カ御病腦ニ依テ元朝ノ出仕延引

セシメ 今日ニ及フ者ナリ然フシテ同十八日御譜

代ノ 諸將采地ヲ賻シ穀高ヲ陪シ恩沢ニ浴ス

所謂





十八万石

江州佐和山ノ城

井伊兵部大輔直政

元八上及高崎ニ於テ十二万石今度佐和山ノ城ヲ割崩シ新城ヲ築キ彦根ノ城ト号ス慶長七年二月朔日ニ卒ス享年四十二歳

十二万石

堺州

本多中務大輔忠勝

元八総州小多喜ニ於テ十万石慶長十六年十月十八日ニ卒ス享年六十三歳

七万石

上州高崎

酒井左工門尉家次

元八下総臼井ニ於テ五万石元和四年三月十九日ニ卒ス享年五十五歳

六万石

濃及加納

奥平美作守信昌

元八上州小幡ニ於テ三万石慶長十九年三月十四日ニ卒ス享年六十一歳

六万石

甲及府中

平岩主計頭親吉

元八上及厩橋ニ於テ三万石慶長十九年十月廿日ニ卒ス享年七十歳

五万五千石

遠及横須賀旧領ニ再復ス

本氏大須賀

松平出羽守忠政

元八上総参宿利ニ於テ三万石慶長十二年九月十日卒享年廿七歳

五万石

三州岡崎

本多豊後守康重

元八上及白井ニ於テ二万石慶長十六年三月廿二日卒享年五十八歳

同

遠及濱松

松平内膳正康廣

元八武及松山ニ於テ一万石慶長六年六月十四日卒

同

濃及大垣

石川長門守康通

元八上州鳴戸ニ於テ二万石慶長十二年七月廿七日卒

同

信及飯田

小笠原兵卫大輔秀政

元八下総古河ニ於テ二万石元和元年五月七日大坂ニ於テ戦死



五万石

上総佐貫

内藤左馬助政長

元八日所ニ於テ七丈内藤孫次左門家長二万石ヲ領ス寛永十一年十月十七日政長卒享年六十七歳

四万石

駿負府中

内藤三左工門信成

元八豆久出山ニ於テ一万石慶長十七年六月卒享年六十八歳

四万石

本多内記忠朝

元來此度新夕ニ食禄ヲ拜領ス元和元年五月七日難波表ニ於テ戦死

三万石

三州新屋但七丈ノ遺領

水野六左工門勝成

慶安三年七月勝成入道栄久卒享年八十八歳

三万石

信久高遠田領ニ再復ス

保科肥後守正光

元八下総多高ニ於テ一万石寛永八年卒享年六十八歳

二万石

濃久岩村

松平和泉守家乘

元八上只那和ニ於テ一万石安長十九年二月十九日卒享年四十歳

二万石

三州西尾

本多縫殿介康俊

元八下総佐倉領ニ於テ五千石元和七年二月七日卒享年五十三歳

四万石

下総関宿

松平因幡守康元

元八日所ニ於テ二万石或曰此寸増封ナシ天正十八年九月関宿ニ於テ二万石拜領同十月二万石ヲ加ヘ玉フト云ハリ慶長八年八月十四日卒享年五十二歳

三万七千石

武只川戦

酒井河内守重忠

二万二千石

信久高島本領ニ再復ス

榎訪小太即頼永

元八上只那社ニ於テ一万石寛永十八年正月十四日卒享年七十二歳



三万石 三州吉田

松平与次郎家清 後任玄蕃頭

元八上良八幡山ニ於テ一万石 享長十五年十月廿日卒  
享年四十六歲

三万石 遠良掛川

松平三郎四郎忠勝 後任隱岐守

元八下總小南ニ於テ三千石 寛永二年十月四日卒  
享年六十歲 時ニ從四位下少將

三万石 下總古河

松平丹波守康長

元八武藏東方ニ於テ一万石

二万石 勢良長島内一

菅沼織部正定盈

元八上良赤尾ニ於テ一万石 享長九年七月十日卒 享年六十三歲

二万石 駿州沼津

大久保治右工門忠佐

元八上総藻原ニ於テ五千石 享長十八年九月廿七日卒 享年七十歲

一万石 三州深溝旧領ニ再復ス

松平亦八郎忠利 後主殿頭

七父主殿介下總小見川ニ於テ一万石 領ス

同 三州形原旧領ニ再復ス

松平紀伊守家信

元八下總五井ニ於テ五千石 寛永十五年正月十四日卒 享年七十四歲 時ニ從四位下

同 三州田原旧領ニ再復ス

戸田土佐守尊次

元八豆州下田ニ於テ五千石 元和元年七月七日卒 享年五十一歲

同 武州内

永井右近大夫直勝

元八相良ニ於テ五千石 寛永二年十二月廿九日卒 享年六十三歲

一万五千石 兩總内

青山常陸介忠成

元八相良内ニ於テ五千石 享長八年二月廿日卒 享年六十三歲

享年六十三歲



一万石 駿州 田中

酒井右兵衛大夫忠世 法改雅乐頭

元ハ武久川欽ニ於テ一万石寛永十二年三月十九日卒

同 上炎 那和

酒井備後守忠利

元ハ川欽ニ於テ五千石

同 駿州 奥国寺

天野高兵衛康景

元ハ岡東ニ於テ三千石慶長十二年正月九日故アリテ奥国寺ノ城ヲ出奔シ辺鄙ニ墾居ス 後任備後守

同

水野三左エ門分長

元ハ

五千石 下総 藤浦

植村土佐守康忠

元ハ同所ニ於テ二千石

同 武州 内

山口但馬守重政

慶長十年 台徳公ノ命ニ依テ大番頭ナル日十六年加恩トシテ五千石玉フ曰十八年御勤氣ヲ蒙リ武カ入間郡ニ墾居ス

大岡家諸侯属于御方族或田忠或降泰之輩本領安堵之夏

又去年ノ大乱ニ御方ニ属シ軍功ニ依テ本領ヲ安堵スル輩ハ所謂

五十万石余 国 越後

堀久太郎 秀治

内本庄城七万石村上周防守頼勝柴田城六万石溝口伯耆守秀勝領之

十八万六千石 阿波 国

蜂須賀阿波守至鎮

父辰右衛門家政ハ逆徒ニ属スルエニ難髪メソノ名ヲ達庵ト改メ退隱スコレニ依テ至鎮阿カク領シ慶長十九年ニ泠州



一四ヲ加ハ玉ハルスベテ其高廿五万七千石トナレリ

十七万石余信濃川 讚岐

十二万石信濃川 生駒雅乐頭正俊

此寸美濃金山ノ城ヲ八除キ其代地信濃飯山ヲ玉フ或ハ此寸御加増アリ氏云ヘリ慶長八年二月六日川中島飯山ヲ將シ美作一四ヲ玉ハル

八万石伊賀 筒井伊賀守定次

慶長十三年故有テ領国ヲ没収セラレ

四万三千石石州津 龜井武藏守茲矩

五万千石日州 伊東修理大夫祐慶

去年討從カフ所ノ日国縣四万石ハ 鈞命ニ依テ高橋 氏コレヲ返セリ

三万八千石毛驒 金森治俗名五郎八長也 以法印

二万五千石奥美能 土方勤兵衛雅朝

同和次 高取 本多因幡守利家

大和軍記ニ曰内二万石此寸御加恩トアリ

二万石攝州有馬 有馬兵部卿法印

同 紀伊和奇山ノ城ヲ攻メ和次葛下郡布施ニ移ル 桑山修理亮一晴

一万石 桑山治俗名修理 以法印宗栄 亮重晴 此度隠居セシメ嫡孫一晴ニ高

二万石宗栄二男元晴ニ高一万石コレヲユツル

一万七千石与州 久留島右エ門佐康親

但此寸豊後ノ内ノ所習肥田玖珠速見三郡ヲ領ス 織田河内守長孝



一万石 遠州久野

松下右兵衛尉吉綱

此外浮田秀家カ長臣小彼家ヲ去テ麾下ニ属シ

會津ノ役ニ随カレ且關原ノ戦功アル輩戸川肥後

守達安浮田左京亮成正 後坂崎對馬守ト改ム 花房志广守

職之圖紙前守貞綱亦本領ヲ玉ハリ諸侯ノ列ニ入

各米邑二万石宛 或説ニ 達安成正三万石宛 凡云ヘリ 又取前賊徒タリトイヘ凡中頃

ヨリ御方ニ属スル族本領ヲ安堵ス所謂

七万四百石 豊後竹田

中川右衛門大夫秀成

六万石 濃州黒野

加藤左衛門尉泰景

慶長十五年伯耆米子ノ所替

五万石 濃州郡上

稻葉右京亮貞通

此寸豊後臼杵ノ所替

五万石余 淡路

服坂中務少輔安治

五万三千石 日州縣

高橋右近大夫長行

三万石 日州秋月

秋月三郎種宗

三万石 濃州土岐多羅

関長門守一政

此寸丹州龜山ノ城ヲ賜フ被田領タリト云ヘカ 慶長十五年龜山ヲ替シ 伯耆黒坂五万石ヲ玉フ

二万二千石 肥後求麻

相良宮内少輔頼定

二万五千石 肥前大村

大村新八郎嘉前

二万石 後年二万七千九百石ノ軍役ヲツトム

朽木河内守利綱



此外逆徒ニ属セシ族各歎折レシムルニ依テ本領

ヲ賜フ附録卷ノ一ニモル  
タル者コトニ記ス

六万三千石肥前  
平戸

五万石泉  
和田

三万石但州  
出石

四万石肥前  
島原

同丹波  
萱原

三万石或曰若  
高瀨  
二万五千石

同但州  
豊岡

松浦式部卿法印俗名肥前守鎮信

小出大和守吉英

小出播磨守吉政

有馬修理大夫康純

織田上野介信包

木下宮内少輔俊房

杉原伯耆守長房

宗對馬守義智

二万石豊後  
佐伯

一万六千石肥前  
五島

一万三千石豊後  
府内

一万石

且斤相時田ヲ始メ秀頼ノ近臣七組ノ頭等本領ヲ

安堵ス尚  
追テ書  
加フヘシ

被放小川赤佐之采色夏付松倉之夏

爰ニ去年九月十五日關原ニ於テ裏切セシ小川左馬介

祐滋艾祐忠ハ近比  
病死スト云ク亦佐久共討直保ハツイニ食邑ヲ没収

セラルコレハ兩人何時モ弱キヲ弃テ強キニ属シ義

毛利伊勢守長高

五島大和守盛房

竹中源助後任伊豆守重俊

山崎右京進定勝



ヲ志レテ利ニ走ルユ一 神君甚クシラセ玉ヒ其封境ヲ  
放シレケル又松倉豊後守重正ハ心ナラス凶徒ニ与シ勝  
州津ノ城ヲ請取コレヲ守ルトイヘ氏屬内應ノ旨アル  
ノミナラス其武勇拔群ノ者ナルユヘ本領其マ、アテ行  
ナレケル 領地ハ和次五茶ト云フ所ニテ一万  
三千石ノ後丰肥前島系ヘ所カユ

或曰重正ハ會津ノ役ニ從カヒ小山迫下向スル処ニ  
関西蜂起セシメシカモ重正カ駕島左近ハ石田カ股  
肱ノ臣ナリトイヘ氏重正敢テ其心ヲ変セス并伊直  
政ハ長臣木保清左エ門守吉ト旧友ノ好ミアルユヘ則  
直政ニ屬シ濃カスヘ攻上リ關原戰ノ寸モ直政カ相備

トシテ島津カ魁兵ト奪戰シ自身太刀折シ首  
ハ級ヲ討トリコトニ其家臣山本七助義純島津カ  
後拒ノ士阿多長壽入道カ首ヲエタルト云ハ 冥否  
分明ナラス

### 伊達上杉兩家之兵官代合戰之復

既ニ關西漸ク平均ニ屬ストイヘ氏東國ニハ上杉景  
勝未會津ニ籠居セシカハ秀康以下今ニ至リ  
宇都宮ニ叱セラル然レ上伊達左京大夫政宗ハ再タヒ  
葛西大崎ヨリ二月七日伊達郡ヘ出張シ在々所々ヲ  
放火シテ武威ヲフルフ寸ニ上杉方福島ノ城主本



左城前繁長ハ其子出羽満長ニ數百騎ヲソヘテ是  
ヲ拒カントス且宮代ノ砦ヲハ矢内呂書ト云者二百計  
リニテ守リケル如ニ伊達家ノ先手コレヲ襲フ寸ニ  
福島城ヨリ宇佐美民ノ勝行小瀬美作五十騎  
計リニテ大モノニ出ケルカコレヲ見テホクヲカクト  
リ備フ立火炮ヲモヒハス政宗勢ハ敵ニ程微兵ナ  
ルニシトハ思ハスノシバ々擬議スル如ニ能員ヲ考ヘ宇  
佐美小瀬マツシクラニ掛リケレハ伊達ノ先手棄折  
伊豆カ三百余兵川ヲ夕ヘ退ケハ敵ハコレヲシホニソ  
宮代ノ砦ニ入テコレヲシ摺ニ加ハリケル然フノ本庄

出羽カ魁首蒲生浪人外池甚五左エ門小田切諸左  
エ門入道々ニ布施次郎右エ門村里ヲ打廻リシヲ  
伊達上野介成実郡左エ門ホノ政宗勢コレニ喰付  
シキソニトリヒシカントス寸ニ敵軍大返シノ味方ヲ四町  
ヨリ押立尚ス、~~來~~來レハ石川大和照光斤倉小十郎  
景綱三十ヨリ烟嵐ヲ卷テ押來リ柴田小平次守  
屋伊豆鹿原喜右エ門茂庭兵藏先登メ突入  
シカハ敵軍大ニ狼狽シ三丁ハカリ崩レ、如ニ栗生美  
濃岡左内唐人丹後江波五郎兵衛ホノ福島掬救  
ヒ來リ且宮代ノ砦ヨリハ小瀬美作横合ニ突出シカハ



味方又二下カリ引退クアル処ニ杉原常陸親憲ハ  
百ハカリ左ヨリ廻リ伊達ノ旗本ヲ目カケテ後ヘカ、リ  
本庄出羽ハ右ノ方ヨリ雷登シ大将士卒ニ十間ハカリ  
先走テキソヒスハ宗根刑部方上舎人中村但馬コレ  
ニシテ其寸大崎方ニキリニ鉄砲ヲ打クレハ上杉勢ニ各猶  
豫シケルカ本庄満長一番ニ銃ヲ入ユヘ敵軍コレニ氣  
ヲ得テ一回ニキソヒカ、リ兩陣互ヒニ入乱レ戦争ノ  
音天ヲ響カシ呼喚ノ声地ヲ動カス敵ツクノ味方  
聊カ利ヲ失ナラズニ伊達安房羽根田因幡ホノ政宗  
勢救ヒ来ルトイヘ氏杉原親憲カ猛卒ニ突立ラレ

安房因幡カ兵モ又敗北ス本庄杉原コレニ利ヲエ  
テ一里ハカリ追討シケルハ味方ステニ二百余命ヲ殞シ  
甚タ危フカリシ寸ニ政宗カ後陣金鼓ヲナラシスニ  
来ユヘ敵軍揚貝ヲ吹立忽チ兵ヲカヘシ畢シヌ

兩公移于伏見新城夏付 台徳公御入洛  
御任官之夏

抑伏見ノ城ハ大將秀吉多年心ヲツクシ經營ストイヘ  
氏去年八月賊徒ノタメニ悉ク回祿ニ及フユヘ 神君  
其土地ヲ改メコレヲ築カシメ玉ヒヤウマク其功成就セシ  
カハ同三月廿三日大坂西ノ丸ヨリ伏見ノ新城へ御移徒



アリ西ノ丸ニ天野三郎兵衛康景ヲ留メテ是ヲ守ラ  
シメ玉フ 翌年三宅康貞天野 翌廿四日 台徳公モ又  
大坂ヨリ伏見へ近ラセ玉フ然フノ同廿七日ニ 台徳  
公御入浴アリコト 神君ノ御吹奏ニ依テ從三位左  
中将秀頼ハ權中納言ヲ拜セラレ翌廿八日 台徳  
公中納言ヨリ從二位大納言ノ 宣旨ヲ蒙ラセ玉フ仍  
テ廿九日ニ御参内アリ是日御連枝下野守忠吉朝  
臣侍從ニ任セラレ

伊達政宗又出張于信夫郡夏付 阿武隈川  
戦之夏

斯テ伊達政宗ハ三月廿四日再タヒ二万余兵ヲ卒シ廿  
五日白石ノ城ニ著陣シ一日人馬ノ勞ヲ休メ同廿七日信  
夫郡ノ故地悉ク放火ノ 飯坂ノ佐藤庄司カ田跡  
ニ張陣シ翌廿八日ノ早天ニ木幡四郎右エ門ニ百余騎  
ヲ添テ福島ノ城ヲ窺カハシム寸ニ岡左内ハ福島ノ  
城大手口ニ在ケルカ士卒ニ向テ此大モノミハ必ス 戦ヲ  
持タリ其故ハ廿騎ハカリ先登ニスンテ五十騎ハカリ  
三丁程後ニ允シ又五丁余引下リニ三十騎ミエタリ是  
吾ヲ偽引謀ト覺ユルソ卒ルニ折出ヘカラスト下知  
シケル処ニ暗クアリテ先登ノ廿騎城下ニス、ミ近付



ヲ見テ鈴木彦九郎ト云者左内ニ向テ今日ノ大作候  
ノ内ニハ政宗カ冥元成冥ノ内必スアルヘキ其ニ馬  
強ナル壯士少々授ケ玉ヘハセ向テ討取ヘシト云ケレハ左  
内聞テ某向ハントノ、シリカケ出レハ木幡カ廿騎曹ヲ  
カエシニ陣ニ加ハラントス左内勝ニノリ其兵七十余火砲  
ヲモセ追カケレハ鈴木彦九郎魁シ既ニ其間近クナ  
リヌ寸ニ木幡四郎左エ門只一騎引カヘシ馬ヨリ下テ待  
受ル寸岡左内コレヲ大将ト見テイサミカリ木幡ト  
鉾ヲ接ユル如ニ彦九郎左ノ方ヨリス、シテ木幡ヲ鉦  
付其首ヲエタリ本庄越前繁長モ八十余騎ヲ卒

ニ西ノ木戸ヲ開テ打出トイヘ氏政宗勢大将木幡ハ  
討レヌ早々引取ケレハ城兵モ手ニ合スノ帰城シケル政  
宗ハコレヲ聞テ弥憤リヲ含ムトイヘ氏福島ハ剛敵  
ナリヨハキニ棄テ梁川ヲ抜ヘシトテ今夜阿武隈ノ大  
河ヲ涉リ梁川ノ城近シヒヲ張ルシカルニ梁川ノ城將  
須田大炊今長義ハ享年廿三未タ弱年ト云ヘ  
氏軍旅ニ長シ夜中ニ兵ヲ出メ所々ニ伏置翌廿  
九日ノ早天ニツカラテ遣兵ヲ引卒シ政宗ノ陣ニ向ヒ  
火砲シキリニ祭シケレハ政宗如何思惟シケン忽周  
旋シテ川ヲワタリ兵ヲカヘス如ニ大炊今相房ノ貝ヲ



吹立ケレハ伏兵ホ風ノ如クニ起リ火炮乱レ發シ鯨波  
山ヲ震フシカルニ伊達ノ士大将比倉小十郎景綱ハ先  
隊ナリケレハ引付ハ後殿トナレリコハ景綱カ死スヘ  
キ所ナリトスノシリ勇氣勃然トシ其兵ヲ居リ  
敷ヒ銃フスマヲ作テ待受レハサスカ敵モ猶与シ  
テワツカ十五六間ヲ隔テコレモ居布テスマス互ニ火  
砲ヲヒビセケル寸ニ景綱軍使ヲ濱田治部カ方ヘヒハシ  
諸卒悉ク引トリ景綱一人ヲ弃ヨロシニセラル余寔ニ  
無念ノ次第ナリト申送リケレハ濱田此由ヲ政宗ニ告  
ル政宗シカラハ治部ハ向ヒ比倉ヲ救テ引取シムヘシ沙

ト景綱ニテ引揚ル丁叶ハサルモノナラハイカ程猛  
勢ヲヒハス氏叶ヘカラストク々池向テ援フヘシト  
下知シケレハ濱田則兵ヲ帥ヒテ川ハタマテ押返シ  
軍使ヲ以テ此由ヲ比倉ニ告ケレハ景綱返答ニ其方  
ハ川向ニヒシ銃砲二百挺ヲ差越ヘキ由申送リケレハ濱田  
則松岡清九郎出岸修理カ兩組ノ狂卒二百余ヲ差ヒ  
ハス其寸尺倉ハ松岡カ組ハ川岸ニシテ待受ヘシ山岸  
カ組ハ五勢ノ跡腹ニ備ヲ立ヘキ旨下知シテ自ラ真  
先ニ立上リ白旄ヲトツテ士卒ヲス、メ短兵急ニ敵陣  
へ突入先手ヲ少間ハカリ追崩シソレヲ塩ニシテ引取



ケレハ頂田カ軍卒又モリ返シ追来ルル山岸カ程卒  
間近ク引付ツルヘ折ニ火炮ヲモセケレハ頂田カ兵シヨロヲ  
傾ケ一同ニ折シキ玉ヲサクル其隙ニ景綱ハ川ハタマテ引  
取ケル大炊少長義コレヲミテ旌ヲフリ山岸カ程  
兵ヲ追立テスミ来レハ所倉カ兵水ニ没シ死ヲ致  
スモノ少ナカラス寸ニ川端ニソナヘシ松尾カ程卒シキリ  
ニ敵ヲ折立ルトイヘ頂田カ兵死ヲカヘリミスキノ掛  
リシカハ景綱カ兵ハ氏ニ川ヘ追ヒツサル長義益勝ニ  
イリテ川ヲ渡ス知ニ築地修理ハ付テ向ヒ政宗拵藝  
々トシ強翼ス長追ノフカクスヘカラサル由イサメ

ケル折柄佐竹ノ援兵車丹波モイ付相氏ニ制シケ  
ルユヘ長義モ川中ヨリ凱旋ス今日政宗方死ヲ致ス  
者雜兵四百八十余ト云

政宗与上杉勢於松川合戦景勝方敗北之夏  
甘梁川城兵襲政宗後奪輜重夏

然ルニ伊達在京大夫政宗ハ去秋 神君ヨリ中沢  
主税ヲ以テ閩西イニ夕平均ヒサル間ハ景勝領内ヘ手  
光ヒアルヘカラサル由 徹命ヲ蒙リナカラ去冬ミダ  
リニ出掛シテタカヒ其利ヲ失ナヒ 神君ノ御震怒  
ヲ蒙アラント後悔シカサ子テコレヲ償ハンタメニ時々



信夫刈田ノ両郡へ相シラクトイヘ氏未其功ナカリシカハ  
益 神君ノ御旨ヲ恐レ且先敗ヲ憤リイカニモシテ  
福島梁川両城ヲ抜ント丹府ヲナマフシケルカ四月十  
六日其勢二万卒ヲ引卒シ白石ノ城ニ着陣シ乍  
候ヲ以テ福島ノ城ヲ窺カハント欲ス寸ニ従才伊達  
上野介成実エテヲノゾミ手勢十余騎狂卒批人ハカリ  
リ携へ福島へ赴キ十二三丁前ニ拠ヲ残シテ只一騎  
城郭ノ堀際へ乗付大音揚テ菟城ノ部将ホカ姓  
名ヲ尋子城ノ形勢ツクタト巡見シケレハ上杉家ノ  
軍甚ク彼大勇ヲ感シ敢テ矢砲ヲ祭セサリシカハ

成実心シツカニ監察シテ白石へ皈リ畢ヌステニ政宗  
ハ同才一日小山ト云所へ陣ヲ移シケレハ福島ノ城  
ヨリ杉原甘糟本庄出羽岡栗生以下五六千但浪人  
氏相雜  
ハ出張シ松川ニ屯シケル城ヨリ此所マテ  
行程一里ハカリシカハ政宗松川  
辺ニ里民ニ賄賂ヲ与へ上杉勢ユダンセシメハ是ヲ告  
知スヘキ由サトシ置ケル処ニ上杉方聊カ其守リ怠メ  
リケレハ里民ホ歎へノ見セ篤トイッハリ女童部ノ衣  
装ヲ鮮テ旗ニナシ或ハ筵ナトヲ竿ニ付テ立込へ  
ユダンノ由ヲシラシメントス元ヨリ政宗ハ日々モノミヲ出  
シケレハ忽チ此相違ニ應シ同廿五日ノ夜半小山ヲ立



瀬ノ上ヲ經テ翌早天松川へ登向ス上杉家ノ遠  
見ノ者ハルカニコレヲ見テ則馬ヲラドラセ此由ヲ告ケレ  
ハ時ノ当番栗生美濃岡内百騎計リ軍用意シ  
テアリシカハ忽チ松川ノ口より出張ス折シモ雲霧晦  
冥咫尺ヲタモ弁ニサリケレハ政宗勢迫近クスメル丁  
ヲ知サリシニ瀬ノ上ノ方ヨリ高野聖リ二人商者一人  
来リ大崎方既ニ押来ル由ヲ告ルコトニ於テ或ハ川ヲ  
越ント欲シ或ハ待テ夕ノカントノシリ群議マケタル処  
ニ甘糟備後清長杉原常陸親憲馳来リトカクモノミ  
ヲ以テ敵ノ形勢ヲ窺ハント欲シ則軍使三人ヲ遣

ハシヲ各指ク有テノリカリ猪股主膳ハ政宗勢川越  
ノ支度ヲシ諸士障泥ヲ取ズ狂卒空穂ヲ解スシテ  
小荷汰雜人ヲ川下へ退タリ疑カフラクハ吾虚ヲハカリ  
テ押来ルトイハ此味方堂ニトシテ張出セシムルユヘ  
案ニ相違シ引取ト覺ヘタリト云々又井筒小隼人本庄  
團右エ門ハ政宗未タ川ヨリ五丁ハカリ前ニ扣ヘタル上ハ  
川越ノ用意ナキ丁尤ナリ忽チキソヒ後サニニ手間入  
丁ルヘカラス又雜兵ヲ川下ニ立ルハ騎兵ニ川上ヲ越サセ  
下手ニ付テ雜人ヲワタサシタメトニヘタリ殊ニ先敗ヲ  
ソクガント欲シ大軍ヲ催ホシス、ニ来リシ政宗何ノ故



ナクシテ空シク兵ヲカサニヤ半敗カ間ニ川ヲ渡シス、ミ  
来ラシ丁歴然タル由申ケレハ諸將コレヲ信シ政宗川  
ヲ渡シ来ラハ半途ヲ討ントテ各川ヨリニ丁三丁退テ  
化ヲ設ク然ルニ岡左内ハ敵初ヨリ川ヲコヒントノ、シリ  
ケルカ今其詞ヲ空シクセシ丁ヲ憤ホリ手勢五十  
騎ハカリ川ヲ渡シ向ノ方ニ備ヲ立レハハヤリオノ壯士數  
十騎軍令ヲソムキ川ヲユエテ左内ニ加ハリケル杉原栗  
生及宇佐美氏部定昌ノリマハシ、ツヒテ渡シ諸士  
ヲ制止スアクテ政宗ハ十二段ニ備ヲ立河原ヲ一面ニ成  
テ真驀ニ押来ル折節西風吹テ霧忽霽、紅日

甲冑ヲカマカシ赫々タルニ川ノ此方ニワツカニ二三百人  
備ヲ立ル政宗大ニ怪シミ軍使ヲ以テ降人ナルマト問  
セシニ岡左内大音アケテ一戦ヲ欲スト呼ハリ矢砲ヲ  
志セ突入ケレハ伊達ノ魁將片倉茂庭素折四十  
余人東西ヨリ短兵急ニ取カコミモ立シカハサスカノ剛  
士ホモ其身金鉄ニアラサレハ過半命ヲ失ナレた内及  
小田切諸左エ門入道布抱二郎右エ門外池是左エ門  
北川岳書安田勘介宇佐美藤三郎大館左馬允高  
カ岳書ホヤウマツ岡ヲ切抜川表へ引退クテ政宗勢  
シキリニ追カケシカハ北川壘ヲカヒ晴ナル討死ス、繼ヒテ



安田布抱高カモ踏面マリ余ヲ殞スシカレニ政宗ハ平  
日自ラ我フコトヲ好ミケレハ白旄ヲ揮テ味方ヲイサメ  
唯一騎先登ノ川ヲワタシ固ル内カ終首付ヲ猩々  
排ノ羽織ノ上ヨリニ太刀切ル内ハ竈初ヨリ兩刃ノ  
長刀ヲ以テ奮戦シケルカコレヲ折ケレハ二尺七寸ノ  
貞宗ノ刀ヲ抜テ斤午打ニ政宗ノ眉ヒサシヨリ膝頭鞆  
ノ前輪カケテ鋒ハツレニ切付シカ甲冑奇麗ナラサルユ  
ヘ政宗ト知スシテアトノ鞆ヲ打テ落行ケル其寸小田  
切諸左エ門入道鈴木九郎次郎 後九郎右  
エ門ト改 左内ヲ助  
ケテ引退ソ政宗揚言シテ曰今ソコヲ引坊主メカエ

シテ錢ヲセマカト云ケレハ小田切フリカヘリ時モ時ニヨルハト  
答ヘ川ヲ越テ難ナク味方ノ中へ入既ニシテ伊達ノ魁兵  
半ハ松川ヲワタス処ニ粟生美濃先手トシテ本庄出羽  
甘糟 杉原キノヒ掛ル伊達ノ先手崩レ走リニ陣  
ノ扱モコレヲ救ハスノ引返シケレハ杉原親憲敵ハ  
偽引ト見ヘタリ長追スナト云ヨリモ尚スミヤカニ伊達安  
房屋代勘ケ由兵衆茂庭周防大備ニ三段政宗旗  
本ト組合セ四半ニ鐘ヲ馬印ヲスメ赤ハシカイノ旌旗  
ヲ川風ニヒルカヘシ鼓声山ヲウケカシ雷祭シケレハ敵大ニ  
狼狽シ川ヨリ此方ヘニケ帰ル寸ニ此倉小十郎 伊達



安藝高野一政業折點リホ川ヲ倍リウシカノ如クス、ミ来ルユヘ景勝方惣敗軍ヲナリ討ルモノ数ヲ知ス政宗勢汗馬ニ鞭打テシキリニ追カクルユヘ上杉方ノ敗軍或ハ肥満シ或ハ不行歩ノ族心ナラズ命ヲ失ナヒ乗馬多クハ万涉ノ稠子切レテ斃レ七ニ幸ニ死ヲ免カル、七軍モ長柄鉞ハ云ニ及ハス持鎗長刀スラ携ル丁アタハス曾佩楯ヲ服ヤナクイ皆コレヲ弃ケレハ途中洽カモ戎器乱麻ノ如ク肝膽地ニミシレ膏臍野ヲ潤ホス福島川ノ間ニテ本在甘糟鉄上野永井善左エ門安盛青木新兵未数夜返シ合セ奮戦ス中ニモ

永井ハ日来小長ノ馬ヲ好ミ短柄ノ十文字ヲ持ケルユヘ諸士ニスクレ其進退ノ下自由ヲエテモツトモ手イタク拒キタカヒケル政宗ノ逞兵鹿間縫殿今衆ニ抽ンテス、ミ来リ景勝方矢内景書ヲ組伏セ其首ヲエント欲スル如ニ矢内カ郎従長市七郎左エ川折合マテ主ヲ助ケ縫殿今又討トル福島川ノ間ニテ甘糟清長廿騎ハカリフミ止リシキリニ拒キ戦フユヘ上杉勢ヤウヤク川ヲ倍ル甘糟并小田切永井シヅケト引取ルニ伊達ノ大軍ス、ミシタヒ川中ニテ永井カ赤規ヲ三太刀マテ切ケル氏永井ハ戦ヒツカレ



敢テ知不寸ニ青木新玄忠臣付コレヲ援フ川ノ堤  
キハニテ小田切立コラヘ是タアヤフカリシヲモ青木コレ  
ヲ救ヒ引トラシム其外津川孫正宇佐美氏ア父子  
金津新兵衛大館左馬久吉江喜兵忠ホ川ノ向ニ  
フモ止マリ身命ヲツクシ拒キケル其上岡左内此所ノ  
羽黒ト云山ノフモトニ旗ヲ立敗兵ヲ集メ扣ヘシカハサス  
カニ伊達勢モ川ヨリ向ヘス、マサリケル然フノ本左  
出羽杉原甘糟ホノ諸將福島ノ城大平ノ川  
前ニテ折シキ敗兵ヲ悉ク城中へ引入サセケレハ岡  
左内モ心静ニ引取知ニ政宗ニ三百騎ヲ卒シ

歩兵ハ一人モツ、カス真驀ヲニハセ来ルユヘ其糟粟  
生ホモ顛沛ノ急ニ引入城門ヲトサシケレハ岡  
左内ナトハ入丁アタハスシテ柵ノ中ニ伏テ柵門ヲ  
閉シユヘ後殿ノ士十騎ハカリハ柵外ニ立出サル中ニモ  
宇佐美兵左エ門ハ疵ヲカフムリ刺ヘ馬ヲ乗倒  
シ危フカリシニ依テ父民ア馬上ヨリ手ヲヒキ柵キハ  
ニ至ル知ニ政宗既ニ間近ク追来リシカハ永井善左  
エ門馬ヨリ下リ彼兵左エ門ヲ抱キ上ケ鞞坪ヲフマ  
ヘサセ柵ノ中へ入善左エ門ト民アハ柵木ヲノリコヘ死  
ヲ遁レケル津川大館ホノ銃士モマウマク搦手ヘマハリ



墨中へ引入ケル青木新兵衆一人ハ七幅七尺ノ大母衣ヲ  
カケシカハ柵ヲ斂丁タヤスカラスノ撒義スル処ニ政宗  
只一騎駿馬ヲトバセノリ付レハ青木十文字ノ鎗ニテ彼  
内曾ヲ目掛突ケレ氏三日月ノ前立物ニ中リ一方ノ爪  
ヲ突折テ政宗ノ身ニ中ラス寸ニ政宗危ク思ヒケン  
汗馬ニムチヲ加ヘ退キ去ルカル処ニ梁川ノ城主須  
田大炊介長義ハ横田大守築地修理車丹後ニ向  
テ伊達拵松川ノミカタヲ追崩シ福島へ赴ク最モ彼  
城危シ此上ハ阿武隈川ヲワタシ平アテノ兵ヲ討走ラ  
シメ福島ノ城ヲ援ント申ケレハ各同心ス仍テ長義

ハ其兵ヲ二手トナシ車丹波ヲハ中備トシテ本瀬へ  
向ハセ長義ハ川上へ押ハルヲ見テ伊達方柴田小平  
次中日大守石川孫兵衛亦五千余コレヲ拒カンタメ  
二手ニ分レ甚夕軍中動搖ノミヘケレハ柵川拵氣  
ニ乗テ世川ノ奥羽兩國カノ大河ナレ氏味方ノ地ナ  
レハカ子テ浅瀬ヲヨク知タルユヘ忽ハセワタシ兩翼ニス、  
シテ突立ケレハ伊達拵伍乱レ悉ク敗走ス須田  
長盛ニス々勝ニリ直ニ政宗ノ本陣所へ攻入雜兵ヲ  
追テラシ小荷込ヲウバヒ刺へ伊達家ノ九曜ノ  
紋ノ陣幕及紺ノ緒ニ黄糸ヲ以テ法花経廿八



品ノ文字ヲ雉タル彼家相傳ノ幕ヲ長義カ部  
下西村仙右エ門曾田市平次コレヲ奪ヒ取ツイニ小屋  
ヲ焼拂フ黒烟天ヲ掠メ福島ノ城ニヘケレハ岡左内  
城將本庄繁長ニ告テ曰梁川ノ城兵少出テ政宗  
ノ陣營ヲ放火シ後ヲウツトニ上ツリ急キ兵ヲ殺シ  
政宗ヲ立ハサシテ討取玉ヘモシ左ナクハ某ニ鉄炮百挺  
ヲ借玉ヘ忽チ彼旗本ヲ討破ルヘキ由達シケレハ繁  
長ツイニ應セスコレニ依テ左内ハ小田切堵左エ門入道以下  
ノ柵中ニ化シケル軍ヲ携ヘ甚タ小勢ナリトイヘ  
ルトキヲ殺シ短兵急ニス、ンテ攻掛リケレハ政宗ナク

モ後陣ノ敗兵ニ氣ヲ屈セス挑ニ戦フ如ニ城將本  
庄繁長西ノ門ヨリ軍ヲス、メ信夫山ノ方ヨリ政宗  
ノ右ノ跡ヘ押スルヲ見テ政宗急ニ揚貝ヲ吹立  
摺神ヨリ信夫山ヘ引アケ白石ノ城ヘ軍ヲ収メ重  
テ梁川ヲ攻シト欲シケレハ小右衛門ヲ奪ハレ長  
陣叶ヒ難キエヘツイニ大崎ヘ兵ヲカヘス凡ソ梁川福  
ト政宗ハ合戦ノ了莫録ニ詳説ナク割ヘフナクニ記セリ  
予甚タ愁フルトイヘ氏詮方ナク上杉家ノ説ニ拠テ姑クコレヲ記  
ス後人必ス校正シテ  
予ハ素志ヲ果スヘシ

一本曰政宗福島ノ城ヘ旗ヲス、ムル処ニ榊川ノ城  
兵政宗ノ本陣コウリト云ルヘ押寄雜兵ヲ追拂



西村仙右川後教前及三間カ勤ケ由左川政宗ノ  
竹ニ雀ノ紋ニ出ル幕ヲウバヒ取テ大ニ手柄トス  
蓋シカノ紋ハ当時伊達上杉両家氏ニコレヲ用ユ  
其故ヲ尋ルニ元来上杉家ノ定紋ナリシヲ伊  
達晴宗ノ弟曰兵ア大補矣元ノ母ハ上杉貞実  
カ娘ナリシカルニ貞実令嗣ナキユハ孫ノ伊達実元年  
十六氣質純直ナルニ依テコレヲ養子トシ越後国  
ヲ攘ラントテ諱ノ字及宇佐美長光ノ太刀竹ニ  
雀ノ紋ノ幕ヲ贈リ是ヲ契約スコ、ニ於テ天正  
ノ頃カトヨ伊達実元越後ハ往ント吏度スト云ハ

氏祖翁植宗父子内乱出来ルユハ実元猶豫シ  
越後ハ往ツツイニ信夫郡ニ寓居シケルカ実元一  
旦ノ釣ヲ思ヒ竹ニ雀ノ紋ノ幕ヲ用ヒ子孫ニツタハ  
ントス其後元晴宗彼紋ノ幕ヲ所望シケレハ  
実元コレヲ晴宗ニ与フシユハ今政宗ニ至リ永ク竹  
雀ノ紋ヲ用ルト云ハ或曰景勝ノ養父輝虎  
入道謙信ハ長尾六郎為景ノ子トイハ氏関  
東ノ官領上杉憲政ノ令子トナリ又彼上杉家  
ハ勸修寺ノ流トシテ世々竹ニ雀ノ紋ヲ用ユ又伊  
達家モ山陰中納言ノ後裔ニテコレモ家ノ紋



竹ニ雀ノシカルヲ今度ノ軍ニ伊達家ノ幕ヲ奪ヒ  
取テ永ク其效ヲ上杉家ニ用ユルト云ハ非ク後年  
台徳公景勝ハノ亭ハ渡御ノ寸玄關前ニ  
杉ノ葉葺ノ御厩ヲ營シ御相伴ノ夕メニ政宗  
ハ及藤堂高虎施茶院宗伯法下等豫參セ  
シムルユハ熊ト彼御厩ニ梁川ノ城兵カ奪シ伊達家  
ノ法花鍾ノ幕ヲ走ラカシ厨門ニ九曜ノ星ノ幕  
ヲ用ユコニ於テ堵人殆ント胡芦ニ政宗屬赤  
面スト云云此説是ニ近シ

武德安民記附録卷之四終

武德安民記附録卷之五

目錄

- 一 佐竹義宣請赦宥令上洛付相馬氏之夏
- 一 神君遣本多正純於南都伐黃熟香夏
- 一 築新城于江州膳所夏
- 一 上杉景勝請恩免夏付景勝上洛被削封境夏
- 一 蒲生秀行再為會津大守夏付加賜數郡於伊達
- 一 正宗夏
- 一 最上義光拔羽久坂田城夏
- 一 島津父子再三謝罪夏付本多正信山口直友贈起



一 靖文於薩州夏

一 秀賴被招請 兩公夏 付秀賴至于 兩公之營夏

一 台德公姬君嫁加賀利光朝臣夏 付 台德公御下

一 向于武陽并板倉加藤掌洛中洛外之政務夏

一 神君還入于江城夏 付 賜宇都官城於奧平家

昌并青山忠成為江戶町司夏

一 神君叙從一位夏 并 御上洛紀州賴宣公誕生之夏

一 并伊兵部少輔直政卒公之夏 付 南部利直令

退治奧公岩崎表一揆夏

一 賜薩隅安堵之書於島津龍伯夏

一 秋田戸沢等所替之夏

一 佐竹義宣被放常公數郡移于羽州秋田夏

付 岩城宣隆被減穀高移于羽州龜田夏

一 水戸一揆誅戮之夏

一 傳通院殿逝公并 神君再御下向于江府夏

付 金吾秀秋卒公之夏

一 島津忠恒上洛之夏

一 義利公為甲斐国主池田藤松為備前国主

夏 付 武田万千代逝去之夏 并 封作州於森忠

政 賜川中島於忠輝朝臣夏



- 一 神君任大保補大樹<sup>夏</sup>
- 一 台德公姫君入與于大坂<sup>夏</sup>
- 一 頼房卿誕生之<sup>夏</sup> 賜水戸城於頼宣卿<sup>夏</sup>
- 一 台德公兼右大将<sup>夏</sup> 付鳥居忠政為奥州岩城<sup>夏</sup>

武德安民記附録卷之五

佐竹義宣請赦宥上洛<sup>付</sup>相馬之<sup>夏</sup>

斯<sup>テ</sup>坂西既<sup>ニ</sup>平均<sup>ニ</sup>屬<sup>セ</sup>シカハ去年逆徒<sup>ニ</sup>屬<sup>セ</sup>シ奥羽常ノ諸將其罪既<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>迫<sup>ル</sup>ユ各御当家ノ功臣等<sup>ハ</sup>シキリ<sup>テ</sup>聘使ヲハセテ恩免ヲ希<sup>フ</sup>中<sup>ニ</sup>モ相馬長門守義胤ハ會津ノ役<sup>ニ</sup>怠<sup>タル</sup>ユ一領知悉ク没収<sup>セラル</sup>ル<sup>ヘ</sup>キニ極<sup>リ</sup>シカ漸ク旧領奥州ノ内三郡六万石ヲ<sup>玉</sup>リ天正ノ末秀吉ヨリ加恩ノ地江州ノ内五万石ハ永ク放<sup>タ</sup>レ<sup>ケル</sup>又佐竹義宣ハ其科最モ重カリシカハ是ヲ償<sup>ハ</sup>ン<sup>タ</sup>メ水戸ヲ<sup>祭</sup>シ四月十九日伏見



ニ至リ一向赦宥ヲ布

神君遣本多正純於南都伐取黄熟香

付築新城於江洲膳所

同年六月十日

神君兼日

獻慮ヲ伺カハセ玉ヒ本

多上野介正純ヲヒメ南都東大寺ノ宝藏ヲヒラ

カシメ黄熟香

俗ニ蘭奢待ト云

長サ一寸六分ヲ伐取シメ玉フ

勅使トシテ勸修寺右大弁光豊廣橋右中弁総光

柳原右中弁業光参向セシメ宝藏ヲ封ス其後

神君諸牧カサテ伏見ノ城ヲ經營スヘキ由命セラレ

又江ノ大津ノ野ヲ割崩シ諸国主ニ課ホセテ膳所

崎ニ一城ヲ築ホカシメ玉フ幕下ノ士八人コレヲ監察

ス是混一ノ後城郭ヲ築ホカル、権楽ナリ造畢ノ

後戸田左門一西武丸鯨井五千石ヲ改メ此城ヲ玉ハ

リ二万石ヲ封セラル是元ヨリ英士ノ譽レアル故ニ

上杉景勝靖恩免爰付景勝上洛被削封

境

抑上杉景勝ハ亡父謙信英雄タリシニ依テ其臣悉

ク軍旅ニ長シ若輩ノ族ニテ平日武備ヲ専ラト

セシ故伊達政宗猛將ノホレアリトイヘ凡屬其戰

利アラスシテ上杉方勝ニノリシ知ニ羽衣在內筋ノ



景勝方日々ニ昏墜ニ最上義光其威大ニフルヒ  
去月廿四日ニハ義光カ長男修理大夫義康 軍兵ヲ  
引卒シ坂田ノ城ヲ攻ウエカス 高内又七以下ノ從士  
先登ノ首級ヲ得テケダシ  
去秋以來 神君ノ武德ニ依テ諸國ノ凶徒悉ク或  
ハ白刃ノ下ニ伏シ或ハ首ヲ延テ降ヲ乞ヒ既ニ天下無  
為ニ歸シ景勝独立ノ身トナリ其勢ニ弱マリケレハ  
先般長臣直江兼續石田カ倚巧ニ陥リ櫻リニ新  
城ヲキツキ 公ノ御答メヲ受ユニ短才至愚ノ景  
勝コレヲ申披クテアツハスシテ不慮ニ逆徒ノ名ヲ  
蒙フルトイヘ氏元ヨリ異心ナケレハ 公ニ對シ鉞楯ニ

及ハニ一ヲ欲セス今度前非ヲ悔テ此上ハ食邑ヲ  
獻スヘキカ自殺ヲ遂ヘキカトモ角モ 公ノ仰ニ隨  
カニ丹心ヲアラハサシ由結城宰相秀康ハノ許ヘシキリ  
ニ申送リケレハ相公モ上杉數代ノ名家今此寸ニ當  
テ也ヒシコトヲアハレニ 神君ニ歎訴シ玉フエヘツイニ  
御許答有テ景勝上洛スヘキ由 命セラル然ルニ彼  
家ノ從臣亦上下奉ツテコレヲ訝カリ種々景勝ヲ  
揀メケレ氏ツイニコレヲ用ヒス同十旨 御殿ニシタカヒ上  
洛スヘキ由義諾シ則領知ヲ奏足ス 奥武四家合考記ニハ  
景勝上洛七月朔日  
有同八月朔日漸ク伏見ニ着ニ廿四日 神君ノ台前



召出サレ領知百万石余是ヲ放タレ米沢福島ニ  
於テ三十万石余是ヲ安堵スヘキ旨 鈞命ヲ蒙ル  
諸モ景勝弱年シ寸養父謙信ノ遺領ヲ年ソヒ  
上杉三郎景虎輝虎ノ養子ヲ滅シ越後越中佐渡ヲ  
治メ且隣国ノ内庄園數ヶ所ヲ押領シ信長没後  
ニ信長川中島ヲ伐從カヘ且麾下ノ本庄繁長羽次  
庄内ヲ攻取猛威ヲ揮ヒケルカ遂ニ秀吉ノ代ニ至テ  
越中并川中島以下所々ヲ獻シ越後并佐渡羽次庄  
内ヲ安堵シ公々年ハ秀吉ヨリ越後ヲ轉シ會津九十  
一万九千石ヲ玉ハリ佐渡国且庄内元ノ如クコレヲ領シ

東国第一ノ諸侯トナリケルカ奸臣直江カス、メニ因テ  
石田ニ与シ逆乱ヲ起ストイヘ氏 神君ノ寃仁ヲ以  
テ如斯恩免ヲ蒙リシカモ其穀高尚三十万石余  
ヲ安堵シ其格国主ニ准シ社稷ヲ全クスルヲヲ且夕  
リ寔ニ僥倖ト謂フヘシ  
蒲生秀行再為會津大守矣 付加賜數郡  
於伊達政宗矣  
翌廿五日上杉カ旧領奥州會津六十万石ヲ蒲  
生藤三郎秀行後志驍ニ玉ハリ曰景勝ノ嗣地  
十二郡穀高三十万石ヲ伊達左京大夫政宗ニ加恩



セラニ蓋シ秀行ハ太々年故有テ大岡ヨリ會津  
仙道以下九十一万九千石ヲ放タレ野ノ宇都宮ノ  
城十八万石ヲ授ケラレケルカ此度再タレ旧領ニ復  
スル事ヲ得タリ

浦生記ニ曰此寸 神君秀行ニ問テ曰江ノ沙  
カ先祖ノ旧国ナリ彼国ノ内三十万石ヲ授クヘ  
キカ又氏郷功業ノ地タル奈會津六十万石ヲ与  
ヘシカ宜シク望ニ任スヘキトアリシ寸秀行江州ハ旧  
領ノトイヘ氏願クハ會津ヲ領センコト穀高ノ多  
寡ヲ論スルニアラス去年景勝反逆ノ初メ會津

領ノ地士秀行ニ内應シモシ會津ヲ攻ハ必ス裏切  
シテ旧恩ヲ報スヘキ由密約スコトヲ以テ今秀行  
再ニ會津ヲ領シカレラカ微忠ヲ謝スヘキ由謹テ  
言上セシカハ 神君則會津ヲ玉ハリ又江州日  
野ノ牧三万石旧知タルユヘコレヲ授ケ玉フト云ハ

然フノ後秀行再ニ會津ハ入部セシメ諸士ノ功劳  
ヲ賞シ旧好ノ輩ヲ招キ帰シ悉ク食禄ヲ授ケ官參  
議ヲ拜シ勢威既ニ前田家ニヒトシカリシカ慶長十七年  
五月十四日享年卅歳ニシテ卒ス其子下野守忠郷  
封ヲツキコレ又參議ノ官ニ至リ松平氏ニ改ム然ルニ不



幸短命ニノ寛永四年正月四日ニ卒ス寸ニ享年僅  
カニ廿五イマタ其子ナカリシカハ遂ニ其高六十三万石是  
ヲ収公セラレ其弟中務大輔忠知ニ羽州上山三万石ヲ  
改メ与州松山ノ城廿万石并江州日野三万石コレヲ  
玉ハリ従四位下ニ叙シ侍従ニ任シケルカコレモ壮年ニ  
ノ没シ嫡子ナキエハ此寸ニ至テ蒲生ノ家名永ク断  
絶ス又政宗ハ弱年ノ寸ヨリ英将ノホマレ世ニカクレナ  
クシカモ芦名氏ヲ亡ホシ會津仙道以上十七郡ヲ伐  
取猛威ヲフルフ如ニ日アラスシテ大崗秀吉是ヲ削  
リ漸ク本領羽長長井郡奥カ米沢スベテ三十万

石奈ヲ安堵ストイヘ氏故有テ天正十九年九月  
再タヒ秀吉ノタメニ是ヲ放タレ誓ク京師ニ寓居シ  
ケルカ程ナク秀吉憤ホリ散シ木村伊勢守秀俊  
カ瀬地葛西大崎三十万石ヲ与ヘラル然ルニ今度政  
宗神君ニ属シナカラ御旨ヲ背キミタリニ上杉家  
ノ領内へ攻入刺へ屢勝利ヲ失ナフ爰ヲ以テ賞セ  
ラルニ及ハストイヘ氏元来政宗忠志ヲ勵マスト等閑  
ナラスシカモ自ラ敵ニアタリ軍勞少ナカラサルユヘ  
遂ニ景勝カ瀬地三分ノ一ヲ以テ正宗ニ授ケ玉ヒ是  
ヨリシテ恩寵厚ク在江戸在京ノ刻馬蒔料ト



シテ常州信太郡及筑波河内兩郡ノ内一万石江  
及蒲生野洲兩郡ノ内一万石是ヲ玉ハリ且其子  
秀宗ニ与州宇和島十萬石ノ地ヲ封セラル政宗  
遂ニ黄門侍郎ヲ拜シ寛永十三年五月廿四日七  
十歳ニメ逝公スコノ人生質活潑勇健ニシテ  
三代將軍ノ御旨ニ悛フト云ヘリ

最上義光拔羽カ坂田城夏付直江夏

是ヨリサキ景勝ステニ雄伏シケレハ會津ノ枝城悉  
ク或ハ政宗ニ降り或ハ蒲生家ニ和融ストイヘ凡羽  
州坂田ノ城兵信田修理胤宗河村兵藏某ハ戸上テ

最上ニ從カハサケレハ出羽守義光イヨ々憤リヲフクミ  
三男清水大藏ヲ部將トシテ楯岡甲斐本城豊前  
難延越前延沢能登志村伊豆白石備前加藤  
絨後里見源左五門ホ五千余ヲ差キハシ攻破ラントス  
彼勢八月中旬山形ヲ登三月山嶽狩川ヲ経テ坂田  
ヘ赴ムク処ニ城兵最上川ヲ前ニアテ、コレヲ拒ク元來  
此川ハ羽カニ於テ第一ノ大河シカモ渡リヨリ一町ハカリ  
下ハ滄海ナレハサスカ味方ノ兵猶豫メ扣ヘタル処ニ去  
年義光ニ降りシ下治右門十餘丁川上ヨリ獵船  
十四五艘求メ出シ一族与カコレニ取リ川ヲ渡ス寸



ニ敵シキリニ火砲ヲヒビセケレハ味方多ク手負死ヲ致  
スユヘ聊カ擬議セシニ治右エ門カ一族戸井半右エ門先  
登シテ勇ヲフルコレヲミテ清水大藏大音アゲテ  
味方ヲハケニシ唯一騎川へ歩入渡シケレハ從軍ホ魯  
ヲ並ヘテ一曰ニ川ヲ渡シ忽チ敵ヲ突崩シ坂田ノ城  
マテ追討テ首百余級ヲ斬トルカ、ル処ニ最上方へ  
援兵ニ来リシ戸沢九郎政盛カ家臣戸沢相摸  
城下ノ民屋ヲ放火シ味方一曰ニ城ヲ圍ニテ攻ウゴカ  
ス寸ニ城兵矢石ヲ放シ鳥銃ヲ發シ拒キ戦フユヘ寄  
手ノ軍監里見源左エ門以下命ヲ殞ストイヘ氏里見

越後先登ノ大手ノ橋ヲ渡リ郭ヲ攻破リシカハ味  
方ノ猛勢キソニ攻ルユヘ城兵ツイニ笠ヲアゲテ矢當ヲナ  
シ城郭ヲ避渡シ畢ヌ清水大藏則城將ホカ罪ヲ  
宥メ會津へコレヲ送り城ニハ志村伊豆ヲコメ置山形へ  
凱陣シケレハ義光ハ甚タ下治右エ門カ功ヲ賞シ田川郡  
一万二千石ヲ授ケ對馬ト改ム 此オマテ僅ニ  
三千石ヲ領ス 又志村伊  
豆ハ長谷堂ノ城ヲ守リ猛敵ヲ拒キシ勲功ヲ賞  
トシテ三千石ヲ加ヘ庄内ノ城ヲ守ラシム スベテ一万三  
千石ヲ領ス 且  
大梵字ノ田畠ヲ築キ崔岡ノ城ト号シ新田因幡ニ  
七千石ヲ与ヘ騎兵百人狂卒二百人ヲ預ケ彼城代トシ



ナシケル 後ニハ美光雀岡ノ城へ隠 抑景勝カ長臣直江山

城守兼續ハ勇敢ノミニアラス言語巧ニメ鸚鵡ノ

嘴耳又驚カシ進退嚴ニシテ龍虎ノ勢眼ヲサヘキリ

甚夕大岡秀吉ノ電ヲエテ從四位下ニ叙シ剗へ

景勝會津ヲ玉ハリシ寸旨ヲ受テ三十万石余ヲ兼續

ニ封ス然ルニ兼續石田カ奸謀ニ陥リ主ヲスハメテ三成

ニ与セシメ其罪死ニアタルトイハレ 神君是ヲ宥如ア

リ本多佐渡守正信ニ命メ兼續ヲ伏見ニ召御礼ヲ

受玉フ爰ニ於テ毛利家ニハ完戸福原島津家

ニテハ新納野村コレヲ初メトシテ主君ヲスハメ逆

徒トナシ今更ハ唾ヲ吞テ世ノアリサマヲ窺ヒ居タリシ

ヤカラヲ忽チ安堵ノ思ヒヲナシ却テ 神君ノ寛仁

ヲ仰キ再ヒ主ヲイサメ永ク 御当家ハ忠ヲ竭サン

トフソ欲シケル往時直江ハ本多正信カ庶子三十郎

ヲ輝養子トナシ直江大和ト称シケルカ兼續ニ

実子出生セシカハ大和則上杉家ヲ去テ浮田家ニ

仕ハ秀家淪落ノ期ニテ附從カヒ節ヲ変セス世ノ

称美等閑ナラスコニ於テ加賀利長ハ渠ヲ招キ五

万石ヲ授ケ本多安房守ト称シ長臣トツナシケル

或ハ龍初浮田秀家ニ仕ハ申比 直江ハ嗣子トナリシト云ハ非ナリ

直江ハ嗣子トナリシト云ハ非ナリ



島津氏再三謝罪<sup>付</sup>本多正信山口直友  
贈起請文於薩州<sup>夏</sup>

粵ニ薩隅ノ牧島津修理大夫義久入道三位法印

龍伯ハ分国ニ在ナカラ 神君ノ功將宰臣ホニツノリ

頻ニ神君ノ御心和融セシヲ希ヒ殊更山口勘兵

衛直友カ許ヘ数通ノ起請文ヲ送<sup>此盟書直友カ子孫令</sup>

駁路殆ト薩州ノ聘使引モキラス斯テ 神君御憤

リ散シタル上ハ早速上洛スヘキ旨各是ヲ申送ルト

イハ氏竜伯尚モ狐疑ヲ生シ齟齬シテスニマズ爰ニ於テ

井伊直政ニサトシ最前虜ニシタル新納旅庵ヲ薩州

ヘ下シ跡上洛ヲ催ホシケレハ竜伯則鎌田出雲政近

ヲ使節トシテ是ヲ謝シ且正信直友カ起請文ヲ

得テ疑惑ヲ散スヘキ由申オクリケレハ兩人コレヲ諾シ

則盟書ヲ認メ鎌田ニ是ヲ渡ス其文ニ曰

敬白起請文前書之夏

一龍伯同少將殿御身余之儀恙御坐有

間敷夏

一御国之儀者兼而如御約束相遠御坐

有間敷夏

一兵庫頭殿御夏右御兩所御入魂之上



一者毎相遠様御取成可申候夏

奥の罰文アリ

本多佐渡守

正信

慶長六年八月廿四日

山口勘兵衛

直友

島津修理大夫殿

羽柴少将殿

秀頼被招靖 両公夏付 秀頼至于

兩公文管夏

世上ステニ靜謐セシユ一近日 両公武陽へ御下向有へ  
キニ究一リ御暇乞ノタメ大坂へ赴ムカセ玉ヒ 神君ハ西  
ノ丸 台徳公ハ二ノ丸ニ入御秀頼則 両公ヲ本丸へ招靖  
有テ御餐應善尽シ美尽シ猿乐興行セラル寸ニ千  
疊敷ヲ屏凡ヲ以テ四間ニシキリ奥ノ間ニ秀頼ノ母堂  
淀殿其次ニ秀頼其次ニ 神君其次ニ 台徳公御着  
坐アリテ畢テ 神君ハ西ノ丸へ 台徳公ハ二ノ丸へ還御  
其後秀頼西ノ丸ニ至リ駿馬ヲ進上<sup>ナ</sup>鞆置<sup>ナ</sup>斤<sup>ナ</sup>桐<sup>ナ</sup>市<sup>ナ</sup>正旦元  
長袴ヲ<sup>ナ</sup> 庭上ニ出テコレヲヒク 神原式<sup>ナ</sup>大輔 康政  
長袴ヲニ相渡ス 然<sup>ナ</sup>フシテ 秀頼西ノ丸ヲ退去二ノ丸ニ



來臨 台徳公、最初ヨリ西ノ丸ニ渡御秀頼ヲ享シ  
玉ニ秀頼ニ先達テニノ丸へ還御マシクテ是ヲ接待  
シ玉ヲ既ニシテ秀頼本丸へ還ラル當日ノ作法、最モ  
嚴重ナリト云云

台徳公姫君嫁加賀利光朝臣夏付

台徳公御下向于武陽并板倉加藤掌洛

中洛外之政務夏

又是ヨリサキ 台徳公ノ姫君前田肥前守利光 黃門利  
長嫡子

ニ嫁シ玉ヲヘキニキハリ遂ニ九月廿日加州へ御入輿アリ

所謂大久保相摸守忠隣青山常陸介忠成安藤

帶刀重次伊丹喜之助康勝 後播磨守  
任ス 鷲殿兵庫及

医師久志本左馬介等扈從ニ越前金津ニ於テ大久

保忠隣御輿ヲ前田對馬守長種ニ渡シ青山忠成

御貝桶ヲ長九郎左エ門連龍ニコレヲ渡ス今日

台徳公伏見ヲ御祭駕江府へ赴カセ玉フ又是月

神君鈞傘アリテ卿相雲客ノ采地ヲ洛ノ四辺ニ定メ玉ヒ

板倉四郎右エ門勝重加藤喜左エ門正次ヲ以テ京

師ノ成敗ヲ掌ラシメ玉フ此後正次ハ故アリテ其職

ヲ放タレ勝重一人在京セシカ元來氣質純直才智

拔群ニシテ政道最モ正シカリシ是則 大猷公 嚴有公



二君ノ代ニ京都ノ守護トシテ善政ヲ施コシケル右  
少將周防守重宗カ父也

神君還入于江城夏并賜宇都宮城於奥

平家昌并青山忠成為江戸町司夏

同十月十日 神君江府へ御下向ノタメ今日伏見ヲ

御登駕アリ寸ニ米津清右エ門清勝稻垣平右エ門

重種御旨ヲ蒙リ伏見ノ城ヲ守護シケル 此寸松平

重カ光臣云从ノ豪士岡田竹右エ門元次モ米津稻垣ニ加  
ハリコレヲ守ルヘキ由 余アリトイヘ氏故アリテ辞退ス 同十六日

濃久加納へ着御新城ヲ築カルヘキタメ土地ヲ點檢シ

玉ヲ既ニ十一月五日武城へ還入アリケレハ去年九月

朔日御進祭ノ祈柄ハ貴賤悉ク薄氷ヲフム心地ノ御

凱陣ヲ願ヒニ賊徒忽ケ亡滅シ四海一統ニ歸シ今日

還入マシクケレハ士タル者ハ云ニ及ハス農商悉ク撃

壤ヲ歌ヒ歡声恰カモ天ニ徹スカクテ十二月廿八日奥平

大膳亮家昌ヲ召テ野カク宇都宮ノ城ニ於テ十万石

ヲ封セラレコレハ美作守信昌カ嫡子ニテ 神君ノ御外

孫タルユヘナリ又青山常陸介忠成 鈞命ニ依テ本多

佐渡守正信内藤修理亮清成カ列トナリ三輩各

江戸町司トシテ廉直ニ政夏ヲ執行ナヒケレハ弥工商

無為ノ化ニ誇ル



神君叙従一位夏并御上洛紀及頼宣ハ誕生  
之夏

慶長七壬寅正月元日御佳例ノ如ク御譜代ノ諸將  
旗本ノ健士等江府ノ御本城及西ノ丸ニ登營ノ  
両公ハ竭シ奉リ歳首ヲ賀ス同六日 神君従一位ニ叙シ  
玉ヒ台徳公ハ正二位ヲ降シ玉フ仍テ御入洛ノ夕メ同  
十九日 神君江城ヲ御祭駕二月十四日伏見ノ城ハ著  
御緇素悉ク群参シテ御上着ノ嘉儀ヲ述ル然ル  
ニ三月十四日伏見ニ於テ若君御誕生長福殿ト称ス  
後年紀及ノ大守ニ封セラレ玉ヒシ権大納言頼宣 卿

是ナリ此日安藝侍従正則 福島左 従四位下ニ叙シ右少

将ニ任ス同十三日 神君樓船ニ召テ大坂ハ御下向翌十四

日秀頼ハ竭シ玉ヒ終日固碁ノ真ヲ催ホサレ黄昏ニ及ン

テ秀頼ノ臣柘植大炊介カ宅ハ渡御喫茶ノ會アリ十

五日伏見ハ還御ト云云

井伊兵ア少捕直政卒去之夏付南部利直令

退治奥及岩崎表一揆夏

従四位下行侍従兼兵部少捕藤原朝臣直政此頃

病疴ニカ、リケルカ医療術尽テ去二月朔日、享年

四十二歳ニメ終ニ卒去ス 御当家柱礎ノ臣タルニ



依テ君臣拳ツテ悼惜セリ又去年ヨリ奥州岩崎表ニ  
一揆蜂起スコレハ南部信濃守利直表ハ神君ノ味方ニ  
テ内々ハ景勝ニ志ヲ通スルト称シ彼家臣和賀氏  
利直ヲ叛キ政宗ニ内應シ兵ヲ起シケルナリ政宗ヨリ  
白石若狭宗玄方へ信直ヨリ和賀ヲ攻ハ沙是ヲ救フ  
ヘキ旨下知シケルカル所ニ石田七テ天下 神君へ皈シケ  
レハ利直ハ元ヨリ味方トシ領邑ヲ守ルルニ叛臣アリテ  
居城ヲ相窺フ然ルニ伊達家ヨリ渠ヲ見継エ退治  
成難シ其上深雪道ヲ埋テ行軍ニ便ナシ来春ニ  
至テウツヘキ間檢使ヲ玉ルヘキ旨ヲ靖ケル爰ニ於

テ 神君不審ニ思召御鷹師大屋小右エ門ヲ鷹求  
ニ托シ和氣ヲ伊達ヨリ救フ丁アルカ見届来ルヘシ  
トテ南部へモハサル此者毎年奥州へ鷹求ニ下向  
シ政宗へモ出入シケルハ濃州追分ヨリ道ヲ替テ仙  
臺領北目ニ下リ必南部ヨリ和賀ヲ攻ル氏ミタリニ  
後援アルヘカラス却テ逆徒ノ如クニ信直ヨリ言上  
スル旨告ケル氏雄取次テ政宗ニ知スル者ナケレハ江  
州ニ赴キ田手肥前ニ申聞ルニ則其旨ヲ屋代勘  
ケ由兵衛追傳ヘシカコレモ小右エ門躰ヲ捥キ者何丁  
ヲカ申ストテ敢テ政宗へ演説スルニ及ハス然レ今



春信直ヨリ梅場安房ヲ以テ和賀カ城ヲ攻サセケ  
レ果ソ白石若狭後援スオニ梅場フルヒ戰テ大ニ  
勝鬼柙坂追討シ鈴木將監以下ノ政宗方多ク  
斬獲シ和賀氏ヲ降シ大則右ノ首ヲサケ弥政  
宗ヨリ逆徒和賀ヲ救フ燈ヲアラハサントスユレニ依テ  
神君ヨリ其丁ヲ尋子サセ玉ハ政宗漸大屋カ告  
知セタルヲ聞テ大ニ驚キユメ々援兵ヲセハス丁ナキ由ヲ  
陣シケルコトニ於テ信直此方ヨリ和賀ヲ差登セヘキ  
間政宗方ヨリ白石ヲ召メ突否ヲ乳サレヘキ旨願ヒ  
奉ル故御許容アリテ兩人ヲ召登セラルル処ニモシクハ

龍初政宗へ偽リ謀テ申ケル歟和賀即生害ニ及  
フユへ南部モ是非ナク首分リ差上シカハ白石ニ御免  
錢迄モナク其丁モダシ玉ヲ借利直ニハ本領安  
堵スヘキ旨 命セラル

賜薩隅安堵之書於島津龍伯爰

係ル処ニ薩州ノ使節島津島書忠長伏見ニ来リ  
龍伯忠恒カ進物ヲサケ 神君ニ拜謁ス歟ニ  
神君忠長ニサトシテ曰義久上洛延引スル所以ハ吾  
ヲ以テ欺ムクトスル歟彼疑惑ヲトカンニハ誓言状ニ  
如シトテ則コレヲ賜ハリケル其詞ニ曰



兩度使節説着候然者薩广大隅諸縣  
之儀此間張相拍候分相違有間敷候少  
將更其跡被讓更候間不可有別儀候  
兵庫頭茂者龍伯每等閑以之間異儀有  
間敷以日本國大小神祇別而八幡大菩薩  
毛頭不可有表裏者也

卯月十一日内大臣

龍伯

於テ忠長謹シテ洋戴シ陪臣国師太兵衛ニ授

ヲ薩カニ下シケルカ忠長渠ニ告テ曰今此台翰ヲ  
玉ハ丁島津家ノ大幸何カコレニ加ヘンシカニ上六其  
贖ニ殆ント泰ノ照王カ十五城ヲ以テ易シ丁ヲ求メ  
シ夜光ノ玉ニ陪セリ亘シク海陸此ニ慎ンテ是ヲ失  
ナフ丁ナカレト云ヘリ又忠長ニハ駿馬一疋大鷹一連ヲ  
ソ賜ハリケル

秋田戸沢等所替之更

秋田東太郎実季 本氏安東ノ城  
之助氏称ス 丁ハ世々津輕ノ境  
ヨリ関ト云所迄六万石ノ地ヲ領メ往昔ノ~~久~~久ノ鎮  
府秋田ノ城ヲ以テ居住トス士崎ノ湊ヨリ東方ニ当



レリ故ニ代々秋田城ノ今ト僭稱ス此度当所ヨリ常陸  
ノ内完戸五万石ノ地ヲ玉ハリテユニ移ル又秋田領関ノ  
境ヨリ院内迄六万石ヲ領シ横手ノ城ニ住シケル小野寺  
遠江守ハ運ヲ計テ引ゴミシユニ所領ヲ没収セラル小  
野寺カ麾下六人アリ其領スル地穀高合テ恰カモ小野  
寺カ米邑ニ紹タリ彼六人私ニ神君ハ属シケルニ先其  
長タリシ戸沢九郎五郎政盛後任右京亮ハ常陸ノ多賀郡  
ニ移リ四万石ヲ玉ハリ相繼テ六江兵庫頭政乗ハ常  
陸ノ国府一万石ヲ拜授仁賀保本堂打越赤尾津  
各小祿ナリ皆本高ヲ以テ所僭有テ麾下ニ奉仕

ス戸沢ハ元和八年六月羽カ新庄ノ城ヲ玉ハリ二万石  
増封且新田八千石ヲ合テ六万八千石トナル六郷モ其  
改ニ羽カ本城ノ城ニ於テ二万石ヲ玉ハリ秋田ハハルカニ  
年ヲ経テ奥カニ三春ノ城ニ移ル今度日根野織ヲ正  
吉明ハ故有テ信カ高島ノ城ニ二万八千石ヲ放タレ野  
州壬生ノ城一万五千石ヲ玉ハリ又電臣土屋民ア少捕  
忠直総州久苗利ノ城二万二千石ヲ玉ハリ土井甚三郎  
利勝後大炊又ニ任スニハ同国小見川ノ城一万石ヲ玉ハリ且菅  
沼小大膳定利カ猶子忠七郎忠政松平氏ヲ玉ハリ  
從五位下ニ叙シ撰津守ニ任ス是ハ奥平美作守信



昌カ三男ニテ 神君ノ御外孫ノ同四男松平下惣守忠

明上久小幡ヲ改メ三カ作手并ニ江ノ内三カ石ヲ賜フ

佐竹義宣被放常カ数郡移于羽カ秋田更

付岩城宣隆被減穀高移于羽カ由利庄亀田更

同五月八日佐竹右京大夫義宣領知常陸ノ内五十三万石

ヲ放タレ羽カノ秋田山本河辺山之平鹿雄勝六郡ヲ

玉ハリ向後廿万石ノ軍役ヲ勤ムヘシト伏見ノ城へ召テ

本多正純ヲ以テ 鈞命アリ 或曰此寸マツ秋田五万石ヲ玉ハリ

ルト云々是非分明ナラス又曰義宣常陸ノ領知ノ内三十六万石本領ニシテ

其餘ハ義宣カ代ニ押領ノ地ニコレニ依テ其本領ニ相応ノ碁地ヲ撰ハレ

小野寺カ没収ノ地秋田実季カ旧領且戸沢六江ホ由利衆ノ今マテ取来ル

地ヲ合セテ十八万石ノ高ナレ氏土地甚ヒクシテ恰カモ二十六万石ニ及ヘルユヘ

是ヲ玉ハリ移ルト云ヘリ 義宣謹ニテ 台命ノ覬ヲ羨服

是恐ラクハ正統ナルヘシ シワツカニ七十余騎ヲ携羽カヘ赴ケル其寸家臣郡馬

氏某大ニ憤ヲ含ニテ義宣カ馬ヲ扣ヘイサメケルハ抑

当家ノ領内偏小ナリトイヘ氏精兵恰カモ四五万粮米モ

亦十年ノ畜ヘアル共何ソ天下ノ兵ヲ動カシ快ヨク

一戦ヲ遂玉ハスノ徒ツラニ 祖宗ノ国ヲハナレ社稷ヲステ

テ遼遠ノ地ヘウツサレ然モ穀高甚タ削ラレ永ク家名

ヲ穢サル丁何丁ソヤト申ケレハ義宣カ曰汝カ言甚タ

アヤテリ既ニ得川殿諸国ノ大敵ヲ或ハ亡ホシ或ハ降

シ四海一統ニ治ス今豈義宣カ微カヲ以テ是ニ敵スル



アタハンヤ且先年謀計ヲカマヘ一朝ニメ旗下三十三氏ヲ亡シ其食邑ヲ并ス故ニ彼子弟臣従今尚我國内ニヒソマリ居テ待者少ナカラス然ル上ハ某領邑ヲ成リ一戦ヲ遂ニト欲セハ必ス彼族ツイヘニ棄テ仇ヲ復スルノ心ナキコトヲエシヤ唯曰邦ヲ放タレ耻カシメヲ受ルモ是命ナリ今更何ソ恨ルニ足ヤト謂ケル郡馬某涕泣ノ退キケル蓋シ義宣カ三十三氏ヲ亡ホセシ其ユエニハ又修理大夫義重氏略ヲ以テ江戸但馬守重道ヲ亡ホシ其地ヲ押領シ終ニ家督ヲ義宣ニ与ヘ其身ハ領内太田ノ城ニ退隱ス然ルニ天正十八

年小田原ノ北条氏滅亡ノ寸義宣モ大洞秀方吉ノ旗下ニ属シ本領ヲ安堵シ且南常陸ノ三十三家ノ国士ヲ吾与カニナシケルカイカニモノ渠ホヲ亡ホシ其食邑ヲ吾有ニセント謀ヲメクヲシ石田三成ニ媚ヲ求メ三十三氏ノ族マモスレハ義宣カ命ヲ背ク由ヲ大洞ニ洩シケレハ秀吉色ヲ起メ曰吾ステニ義宣ヲ以常陽ノ主トスシカルニ渠ホ頑凶ニシテ義宣カ制ヲ受サルコソ奇怪ナレ早ク是ヲ誅伐シ心ノ終ニ国内ヲ治ムヘキ由宣マヒケレハ義宣大ニ悦シテヤカテ飯田シヲテ食宴ニ託シ三十三氏ヲ招キ寄悉クコレヲサシ殺シ其郡邑ヲ并吞スカ、リシカハ自



国隣国ノ責賤義宣カ暴悪ラニシテ後ナカラシコトヲ  
称セシカ遂ニハ由ナキ奸臣ニ与シ旧邦ヲ失カフト云ヘ  
氏尚モ家名ヲ保チ永ク諸侯ニ列ナルコソ僥倖ナレ  
クニ於テ松平周防守康重松平五左エ門一生由良  
新六郎国繁藤田能登守信吉菅沼与五郎等台  
命ニ因テ水戸ノ城ヲ請取是ヲ守ル本多佐渡守正信  
交保相摸守忠隣佐竹カ旧領ヲ点檢シ制法ヲ沙汰  
シ畢又又コレヨリサキ松平周防守康重ハ蒲生カ旧領  
ノ内常州笠間ノ城三万石ヲ玉ル元ハ武貞寄西ノ城ニテ二万石松平伊  
豆守信一ハ同州土浦ノ城主トナリテコレモ三万石ヲ封セ

ラ元ハ下総布川ノ城ニテ一万石又佐竹義宣カ弟岩城但馬守宣隆  
モ兄同意ノ不義ニ依テ奥カ岩城十二万石ヲ放タレ  
羽久龜田ニ於テ三万石ヲ玉フ

水戸一揆誅戮之夏

其後本多正信大久保忠隣ハ水戸ヨリ江府ニ飯リ松平  
周防守康重モ笠間ニ暫ク歸城シケレハ其虚ニ乘  
テ佐竹浪人車丹波猛虎其子所左エ門馬場和泉其  
子新助大窪兵藏ホ一揆ヲ催ホシ水戸ノ城ヲ乗取  
シテ欲シ兵藏家人ヲヒソカニ城内へ入ル寸ニ松平五左エ門  
一生カ番所ニテ彼者ヲ捕へ推問セシムル処ニ懐中ヨリ



一揆蜂起ノ回文ヲ丑タリシカハ則渠ヲ面縛スシカルニ周  
防守康重カ城中ニ殘シ置從者急キ笠間<sup>ノ</sup>注進シケ  
レ廉重忽チ鞭ヲ揚テハセ来リ水戸城へ入然フシテ  
其夜子ノ刻ハカリニ一揆キツヒ来リ三ノ丸ヲ攻ウツトイハ  
城兵矢石ヲ放シ火砲ヲ祭シヨク拒キ戦フユヘ賊徒  
利ヲ失ヒテ引退キケルカクテ城將等相ハカリ翌日 調  
略ヲ以車丹波ヲトリヨニシ其外張本ホ悉クカラメ捕ル又  
松平康重太田ノ城ニ於テ馬場和泉ヲ生捕水戸へ送  
シ各モ使ヲ以江府へ注進シケレハ台徳公ヨリ安藤五  
左<sup>五郎</sup>門重信大久保甚右<sup>五郎</sup>門忠長ヲ水戸へ送ハシテ委

細ヲ尋子ヲレ一揆ノ張本五人ヲ江府へ召登セラレシカ殘  
黨ヲコラサンタメニ右ノ族再タヒ彼地へ歸シ悉ハサレ是  
ヲ斬戮シテ其首ヲ獄門ニ梟セララル又土浦ノ城主松  
平伊豆守信一常州府中城定番ヲ六郷兵庫介政業  
ニ相渡シ信一其子信吉ニ代リテ江府崎ノ城ヲ守リ信  
吉ハ水戸ノ番手ニ加ハリ各昼夜警衛更ニ惜タラサリ  
ケレハ此後一揆起ル丁ナク国民安堵ノ思ソソナシケル  
傳通院殿逝去并ニ神君再御下向于江府  
夏付金吾秀秋卒去之夏

八月廿九日江府ニ於テ

神君ノ御母君薨ニ玉ア

御年  
七



十五三列州屋ノ城主水野左エ門大  
夫忠政ノ息女シ 御太方殿ト称ス 傳通院殿光岳芙蓉  
智香大姉ト溢ス既ニ此丁伏見へ達シケレハ 神君ノ  
御悼惜限リナカリシ国主郡長諸士医陰ノ族マテ  
悉ク登營ノ 歎詞ヲ述ルカクテ 神君十月朔日伏見  
ヲ御發駕武江へ御下向アリテ彼御追善ヲソ 修セ  
ラル立月八日御度子万代殿ニ水戸ノ城廿万石ヲ玉フ  
母堂ノ氏ニ依テ武田ト称シケル同十月十八日備前美  
作ノ牧権中納言從三位行兼左エ門督豐臣朝臣秀秋  
逝ス享年廿二歳嗣子ナクシテ家断絶ス

島津忠恒上洛之夏

抑当夏島津圖書忠長カ使国師太兵衛薩隅安堵  
ノ 台翰ヲ携ヘ昼夜ヲ分タズ下国セント欲シケレハ海  
上風荒クシテヤウヤク林鐘ノ頃鹿兒島ニ至リケレハ則  
島津義久入道竜伯大ニ喜説ノコレヲ拜戴シ上洛ヲ  
催ホス 此ニ公々年唯伏セシ伊集院源次郎カ從  
黨再ヒ分国ニ蜂起シテ黑白分チ難ク群疑腹ニ  
満ルニ竜伯カ上洛屢ニ滞ニ及ヒケレハ伊集院下野  
久治入道抱節并ニ比志島鎌田喜入伊勢守ノ長臣等  
神君ノ御震怒アラントテ慮ハカリシキリニ 龍伯ヲ疎  
メ上洛ヲ催ホストイヘ氏一ニハ逆徒其慮ニ乘シ 弥勃奥



セシテヲ恐レニニ尚モ 神君ノ御憤リ散セシテ其禍  
ヒ身ニ及ハンカト疑惑ノ空シク日ヲ送ルユハ八郎忠恒  
止レ了ヲ得ス龍伯カ代官トシテ上洛スヘキニ決シケレハ  
功臣伊勢兵ノ貞昌川上源三郎久国北郷比志島敷  
根三原ホ大ニ悦ヒ則忠恒ヲ伴ヒ上京セント支度シケ  
ルカ種々算策ヲメクヲシハ日オ七日伊集院源二郎ヲ  
日州諸縣郡野尻ニ於テ是ヲ誅シ其母及弟三人且日  
類悉ク所々ニ於テ是ヲ戮シ畢リ又故ニ淹留多日ニシ  
漸ヤク冬ニ到リ日州細島ノ津ヨリ纜ヲトキ日ヲ經  
テ攝州兵庫ノ浦ニ至リケルオニ福島左エ門大夫正則

在国ノ夕メ藝州へ渡海セシカ忠恒ニ行遠レ年来ノ朋  
友コトニ彼家ノ愁訴ヲ取持ケルユヘ大ニ悦ニテ則忠恒  
ヲ伴ヒ帰帆シテ大坂ニ至ル処ニ 神君既ニ東国へ御下向  
ユヘ彼地ニ寓居シケルカ、ル処ニ十二月廿五日 神君再タヒ  
御入洛伏見ノ城ニ着御アリケレハ忠恒伏見ノ福島カ  
營ニ来リ日オ八日正則ヲ導トシテ登城セシメ色々ノ  
進物ヲ捧ケ台顔ヲ拜シケル此寸陪從ノ士多シト  
イヘ氏皆城外ニ在テ聊カ殿中ノ傍ヲニ近付レ了リアタ  
ハス唯島津圖書伊勢貞昌比志島国貞川上久国  
敷根頼幸三原某此五人忠恒ニ從リ寸ニ頗クフル御懇



ノ上意ヲ蒙アリ且駿馬二匹鷹二連ヲ忠恒ニ賜リケ  
レハ忠恒感謝ノ余リ手ノニイ足ノフム丁ヲ覺ス既ニシテ  
羽書ヲヒセ薩カスヘ告ケレハ島津ノ一族老臣ハ云ニ及  
ハス薩隅両カスノ士農工商悉ク神君ノ寛仁ヲ称嘆  
セサル者ナシ是ヨリシテ島津氏專ラ御当家ヘ勤功  
ヲ勵マシ慶長十丙午九月朔日忠恒御称号御諱字  
ヲ拜受シ松平陸奥守家久ト改ム是則松平薩守是  
人琉球国ヲ征シテ彼国ヲ賜リ終從三品ヲ拜シ黄川  
侍郎ニ至ル

義利ハ為甲斐国主池田藤松為備前国主也

武田万千代逝去之夏并封作州於赤林忠政

賜川中島於忠輝朝臣也

慶長八癸卯正月元日諸侯悉ク大坂本城ヘ登テ秀  
頼ヘ謁シ歳首ヲ賀ス是ハ日臘晦日神君ヨリ元旦ニ  
ハ恒例ノ如ク諸侯秀頼ヘ参賀アルヘキ由鈞命アル  
ニ依テ在伏見ノ族悉ク夜中ニ大坂ヘ下リ今朝秀  
頼ヘ謁ス又伏見ニ於テハ御普代ノ大小名旗本ノ健士  
悉ク神君ヘ拜謁シ新年ヲ祝シケル翌二日外様ノ  
諸侯昨曉大坂ヨリ歸泰今朝神君ヘ参賀ヲトケ  
此是月甲斐国ヲ五郎太丸義利ヘ玉ハル此君後ハ尾



張国ヲ封セラレ遂ニ正三位権大納言ニ至リ玉ヲ後美直ト改ム

又神君ノ御外孫播ノ侍従輝政カニ男藤松松平

左エ門督ニ備前国ヲ玉ハルシカリトイヘ氏今年一僅カニ五

歳タルユヘ凡利隆松平武藏守ト称ヌ母ハ中川瀬兵衛清秀カノナリ藤松ニ代テ国

務ヲ執行ナヒケル曰二月六日常カ水戸ノ城主去年十二

ヲ封セラレ武田万千代信吉逝去才ニ廿ニ歳神君ノ御庶子母堂ハ秋山氏ノ女或ハ武田信玄ノ女此日

本右近大夫忠政カ領邑信カ川中島ヲ傳シ作カ

一回ヲ玉ハリ松平上総少忠輝朝臣然カ佐倉ヲ傳

シ川中島十八万石ヲ玉ヲ或ハ皆川山城守照飯山ノ城四方石ヲ玉ハリ忠輝朝臣ハ附属セラルト

云説アリ

神君補大樹任大保古又

同月十二日神君征夷大將軍ニ補シ右大臣ニ御傳任

淳和斐学兩院别当源氏長者牛車兵杖ノ宣下

ヲ蒙ラセ玉フ寸ニ結城宰相秀康ハ權中納言ニ

任セララル又播ノ侍従池田輝政右近衛權少將ヲ拜

シ京都ノ守護板倉四郎右エ門勝重従五位下ニ叙シ

伊賀守ニ任ヌ同廿一日神君伏見ヨリ御入浴ニ糸ノ

御館ニ御滞坐日廿五日大樹大保宣下ノ拜賀ト

シテ御泰内供奉ノ行列殆ント嚴重ニシテ觀ル

者恰カモ堵ノ如シ



台徳公姫君入輿于大坂夏

四月廿二日豊臣秀頼内大臣ニ任セラル且 台徳公ノ姫君

御幸 七歳 秀頼享年十一歳一嫁シ玉フヘキニ極メリケレハ御婚礼ノ規

式ヲ調ヘラルヘキタメニ 大御臺所後崇源院 殿ト称ス 武江ヨリ伏

見ヘ登ラセ玉フ 寸ニ台徳公ハ江シカルニ伏見ニ於テ御平産

女子御誕生 御生長ノ後京極若狭守忠高ニ嫁シ玉フ 群臣悉ク恭賀シケル同七

月廿日姫君伏見ヨリ楼船ニ召テ大坂ニ赴ムカセ玉フ大久

保相摸守忠隣以下扈從ス秀頼ハ浅野紀伊守幸長

ヲシテコレヲ迎ヘ玉フ関西ノ諸侯悉ク川辺ヲ守護シ

ケルカ中ニモ黒田筑前守長政ハ弓鉄砲ノ経卒六百人

錢三百本ヲ以テ嚴重ニ警衛ス堀尾信濃守忠氏ハ

人夫三百ニ招ヲ持セ所々ニ差置川中ヲ洲アリテ

楼船ノ通り難キ所ニ至テコレヲ穿チシカハ最モ御

船滞ル丁更ニナカリシ 後日 神君コレヲキカセ玉ヒ堀尾カ所為ヲ感シ黒田カ守禦ノ嚴ナルヲ譽玉ハスト云ハ

又兼日大坂ノ群臣昏穢ノ曰大平ノ橋ヨリ 櫻ノ

門ノ内玄関前ニ至ルマテ置ラシキ其上ヲ白綾ニテヲホ

フヘキ田申ケレ氏氏 桐市正元旦日来 大御所過美ヲ

好ミ玉ハサルユヘ此丁 賢慮ニ忘スヘカラサル由シキリニ

コレヲノベテ遂ニサシ止ムト云ヘリ

頼房ハ誕生之夏付賜水戸城於頼宣ハ夏



日八月十日 神君若君誕生窟松殿ト称ス後年水  
戸ノ城主トナリ玉ヒシ権中納言頼房ハ是ノ日十  
一月七日常カハ水戸ノ城ヲ常陸ノ頼宣ニ進セラル此  
君慶長十四年十二月十二日水戸ヲ改メ駿遠兩國五  
十万石ヲ封セラレツイニ駿遠ヲ將シ紀伊国并ニ伊勢  
ノ内松坂田丸ヲ玉ハル其節頼房ハ水戸ノ城ヲ拜領  
セラル

台徳公兼右大将 付鳥居忠政為奥州岩

城城主 良

日十月七日 台徳公右近衛大将右馬寮ノ御監

ノ宣下ヲ蒙ラセ玉フ今年故鳥居彦右エ門元忠  
カ嫡子左京亮忠政七ノ遺領上総矢作四万石ノ  
地ヲ將シ奥州岩城十萬石ヲ賜フ寸ニ 神君忠政  
ニ命有テ曰故元忠伏見ノ城ヲ守リ賊徒ヨリ 城  
郭ヲ渡スニ於テハ城兵等カ命ヲ助ケ東国ニハス  
キ由丁寧ニ是ヲ申送ルトイヘ氏元忠敢テコレニ應  
セス其余ノ将卒ニ義ヲ励マシツイニ城ヲ渡サス 戦  
死ヲ遂ケ 当家弓夫人格ハ義ニ死スルヲ旨トシ難ヲ  
遁レ身ヲ保ツト欲セサル実ヲ天下ニ顯ハス段感ス  
ルニ堪タリ故ニ今沙ニ報ユルニ大祿ヲ以テス新恩ノ地



ニ寺ヲ營シ七父ノ追善ヲ修スヘシ必ス怠タルナ  
カレト 鈞命有テ忝ナクモ 御落涙ニ及ヒ玉ハ忠政  
謹ニテ拜謝シ列坐ノ群臣悉ク袖ヲウルホス 斯  
テ 忠政岩城へ入部ノ元忠カタメニ宇ヲ建立シ彼法  
諱ヲ以テ寺号トナシ長源寺ト稱ス此由 台聞ニ及  
ケレハ則永代百石ノ田ヲ寄附セラル割サヘ重子テ  
忠政ニ上総国竹貫ニ万石ノ地ヲ加恩セラレ難波兩度  
ノ役ニハ忠政ヲノ江城ノ本丸ヲ守ラシメ玉フ且元和八  
戌戌 台徳公忠政ヲ封境ヲ轉シ羽州山形廿四万石  
ヲ賜リ從四位下ニ叙シ恩電ニ浴シ畢ヌ嗚呼逆徒勃

起シ四海崩離ストイハレ 神君ノ大徳ニ因テ庚子  
秋冬ノ間悉ク平均ニ属シ辛丑ノ年上杉佐竹ノ  
猛敵終ニ雌伏シ島津ハ種々嘆訴シテ其罪ヲ  
償ナレ壬寅ノ年領国安堵ノ 台翰ヲ得テ上洛シ  
今年ハ亦 神君右府ヲ拜シ幕府ノ 宣下ヲ  
蒙ラセ玉ヒ 台徳公モ右幕下ヲ兼サセ玉フ蓋  
シ四ヶ年ノ間大濶蒙ノ諸侯及御譜代ノ部將  
等悉ク国郡ヲ封シテ勲勞ヲ賞セラレ終ニ鳥居  
元忠カ忠死ヲ憐レミテ大祿ヲ其嗣子ニ玉フ其  
澤麾下ノ士ハ皆及ハス工商黎民ニ及ヒ皆鼓







